

総合的な学習の時間におけるカリキュラム・マネジメント —第3学年単元「三隅の柿を広げよう」の実践を通して—

紙田 路子

岡山理科大学教育学部初等教育学科

(2017年10月17日受付、2017年12月4日受理)

1. 問題の所在と研究の目的

本研究は子どもの「真正の学び」を保障する総合的な学習のカリキュラム・マネジメントについて提案しようとするものである。

平成14年の学習指導要領の改訂で「総合的な学習の時間」が導入されてから15年が経とうとしている。学習指導要領では、総合的な学習の時間を、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習とすることと同時に、探究的・協働的な学習とすることが重要であることを示している。特に探究的な学習を実現するために「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」の探究のプロセスを明示し、学習活動を発展的に繰り返していくことを重視している¹⁾。

このような探究的な取り組みは、世界でも多く実践されている。例えばイギリスの工業地帯である中部地方のブラック・カウンティ・トラスト (Black County Groundwork Trust 以下BCGTと示す) は、学校とビジネスとしての協力関係を結んで、工業で荒廃した地帯を救出する国の事業の一部の、緑化プログラムを実施した。要請を受けた子どもたちは①「荒廃した工業地帯の景観を改善するにはどうすればよいかという問題設定(課題の設定)」→②「土地の分析と調査(情報の収集)」→③「コンピューターを利用した設計、植物その他の材料の選択、見積もり、クライアントとの連絡(整理・分析)」→④「デザイン・施工(まとめ・表現)」という一連の探究活動を通して、いろいろなことを照合する能力、考えを発表する能力、話す・聞く能力を磨くことができたとされる²⁾。

このように、現実社会にアクセスし、教科の枠組みを超えて学んでいくことで、子どもは「今学んでいることが現実の社会につながっている」という実感を持ち、「わかること」や「できること」の意義を見出すはずである。学びを

社会という文脈に関連付け、知識を社会に埋め込まれたものとして、理解するこのような学びこそが「真正の学び」であるといえよう。

しかしながら現在日本で実践されている総合的な学習は、「真正の学び」を実現するものとはなっていない。文部科学省は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策(答申)」で現行の総合的な学習の課題として以下の3つの点をあげている³⁾。

- ・学校全体で育てたい資質・能力に応じたカリキュラム・マネジメントが行われるようにする必要がある。
- ・探究のプロセスの中で「整理・分析」「まとめ・表現」に対する取り組みが十分でない。
- ・小・中学校の取組の成果の上に高等学校にふさわしい実践が十分に展開されているとは言えない状況にある。

これらの記述からは、総合的な学習で育成すべき資質・能力が明らかでないこと、また資質・能力を習得するための学習過程が十分に保証されていないことがわかる。総合的な学習を構成する目的、内容、方法が曖昧なまま、学習を展開せざるを得ないところにその要因が求められるだろう。

そこで、本研究では、総合的な学習において保障すべき学びとは何か(目的)、どのような題材(内容)を、どのように追究していくことで(方法)それは実現できるのかを主にカリキュラム・マネジメントについて言及することを通して明らかにしていく。

2. 真正の学び

平成29年に告示された新学習指導要領では、探究課題の解決を通して目指す資質・能力について、その実践上の特質から「各学校において目標を定める」としているが、

配慮すべき点として「知識・技能が相互に関連付けられ社会の中で生きて働くものとして形成されるようにすること」「思考力・判断力・表現力については未知の状況においても、活用できるものとして身に付けられるようにすること」「学びに向かう力、人間性については、自分自身に関わること及び、他者や社会との関わりに関することの両方をふまえること」の3点をあげている⁴⁾。すなわち、総合的な学習で目指される資質とは、机上の知識や技能ではなく、社会的な文脈の中に埋め込まれ、活用できるもの、すなわち「真正の学び」であることがわかる。

フレッド・M・ニューマンは「真正の学び」を「有意味で価値のある重要な知的成果」と定義づけた上で、その特徴を「知識の構築」「鍛錬された探究」「学びの学級外の価値」の3点から説明している⁵⁾。

「知識の構築」とは、意味や知識を再生産するだけでなく、それらを生み出していくという大きな挑戦をも意味するものである。このような「知識の構築」についてニューマンは以下のように述べている。

技術を得た大人たちの力量（コンピテンス）に子どもたちが最終的に到達していくことを助けるために、各学校は大人世界に見られる認知活動の一般的な形態に子どもたちを携わらせるべきである。つまり、子どもたちは口頭での会話や文章作成、有形物（physical objects）の修繕や建設、はたまた芸術的パフォーマンスの中で指導されてきた実践を通して、自らの知識や技能を磨いていくべきである⁶⁾。

すなわち「知識の構築」とは、実際の社会的活動—ニューマンの言う「大人世界に見られる認知活動の一般的な形態」—に関わらせることで実現可能になるものである。このような過程を経ることで、子どもは知識を個別にとらえるのではなく、必要な知識が文脈の中で相互に関連し合っていることを理解するのである。

「鍛錬された探究」とは、「①既存の知識基盤を活用する」「②表面的な認識ではなく、深い理解を追求する」「③卓越したコミュニケーションを通して自身の考えや発見を表明する」という特徴からなる探究である。特に「②深い理解」について、ニューマンは「特定の問題や課題を説明するために、個々の知識の関係を人々が探し求め、検証し、創造するときに生じる」と説明する。すなわちひとつのト

ピックをめぐって、討論や検証がなされる時、知識間の関連や系統性が生まれ、トピックについてのより深い理解が得られる—というのがニューマンの主張であろう。例えば、先のBCGTの緑化プログラムの例でいえば、「荒廃した工業跡地の緑化」というトピックをもとに、子どもたちは、土地の分析に始まり、コンピューターを利用した設計、植物その他の材料の選択、クライアントとの調整、費用、環境への負荷の調査等様々な分野にわたって分析、吟味、検討を行っている。「緑化」というトピックをめぐったこうした探究は他分野、他領域にわたる知識を文脈に即して意味づけ、関連付ける。このように、「鍛錬された探究」が保障する「深い知識」とは、目的に応じて系統づけられた、いわば「文脈に位置付けられた知識」でなければならない。

「学校外での価値」とは学校での成功を超えた意味のある言説、作品、パフォーマンスを意味する。近年、学校教育現場においては社会論争問題等について「選択・判断」を行う授業が実践されているが、『「遠い国のお話」『授業だけに通用する形式的な意思決定』に陥りがちである⁷⁾』という批判も多い。また、現実的ではない、実現不可能な解決策を提案する話し合いに終始する例もある。このような教室内だけに通用する知識に基づく、言説やパフォーマンスは真正の学びの産物ではない。BCGTの緑化プログラムの実践のように、現実社会にとって意味のある学習成果を生み出すことのできる学びこそが、真正の学びである。

「知識の構築」、「鍛錬された探究」、「学びの学級外の価値」はいわば知識、技能、態度の複合体とも言えるが、これらは一体となって習得されていくものであり、それぞれが残りの2つの条件ともなる。真正の学びを保障する総合的な学習のカリキュラムとは、生きて働く知識・技能の習得を目的として、上記の3観点を踏まえる必要があると言えよう。

3. 総合的な学習における真正な学びの実現の方法

2で述べた「真正の学び」の観点は、総合的な学習においては、「トピックに正統的にアクセスする事物や環境」、「トピックをめぐる教科の枠を超えた探究」、「学校の枠を超えた意味ある学習成果」と言い換えることができよう。これらはそれぞれ、内容、方法、目的に相当する。しかしながら、これらの観点を総合的な学習に具体化していく場合には、それぞれの学校・地域・子どもの特性に合わせて

調整し、単元計画を立てる必要がある。すなわち単元計画は、状況適応的なものにならざるを得ない。これが総合的な学習の指導を困難にする原因となっている。

村井は、教師へのアンケート調査、及び聞き取り調査を通して、総合的な学習の指導はあまり得意ではないと意識している教師が一定の割合でみられる状況にあることが明らかにした⁸⁾。その要因として以下の点があげられる。

ひとつは、学習指導要領に示され、指導書に例示された内容をもとに、しっかりと準備し教えればよいことに慣れきっている教師にとって、総合的な学習はそのよりどころがなく、何をどのようにしていけばよいかとわからない、という点である。総合的な学習を「あまり好きではない」「全く好きではない」とした教師は、その理由として、「学習指導の目的や内容がはっきりしていない」「単元計画を立てるのが難しい」「指導方法がわからない」等をあげている。学習の計画や進め方に戸惑いを感じている教師が多いことがわかる。

もうひとつは、総合的な学習は活動内容や探究方法の自由度が高いことから、指導や準備に時間を要し、教師の負担感を増大させていることである。「教材を開発していかねばならない」「準備や指導に手間がかかる」という記述からその点が推察できる。

これらのことから、「真正な学び」を実現するための、状況適応的な要件が、そのまま総合的な学習の実践を阻害する要因になっていることがわかる。村井はこれらの改善方法について、12人の小学校教師の聞き取り調査の分析から「学校として複数年度利用可能な単元計画を作成しておく」「学習の記録や成果物を保存し、次年度に引き継ぐ」「実践記録などをもとに当該の単元をどのように学習すればよいか分かるような資料を残す」等を提案している。⁹⁾しかし、このような方法だけでは、「真正な学び」の理念と現場実践との齟齬は解消されない。「学習指導要領に示され指導書に例示された内容をもとに、しっかりと準備し教えればよい」という、従来の教科学習に対する支援と変わらないためである。教科学習と性格が異なる総合的な学習では、支援の方法もまた異なるべきではないか。

教師が総合的な学習において、何を目的とし、そのためにどのような事物や事象にアクセスし、そのような探究過程をたどらせるのかという、明確なビジョン、すなわち教師自身による単元のマネジメントが実現できなければ、総合的な学習における「真正な学び」の実現は難しい。つま

り、教育実践現場に今必要なのは、カリキュラム・マネジメントの方法を示すことであるといえよう。

4. カリキュラム・マネジメントのためのフレームワーク

児童中心の実践（例えばグループによる話し合い、発表、プロジェクトの企画・参加など）は子どものためにより真正な経験を提供するとしてしばしば考えられている。しかしながら、このような実践が、知識の構築や鍛錬された探究を必ずサポートするものであるとは限らない。学校によってあらかじめ割り当てられた課題をこなす以上の価値を、持つものになっていないこともしばしばである。「真正な学び」を実現するには、「知識の構築」「鍛錬された探究」「学校外の価値」の観点をもとに、教師自身が主体的に単元を構成する必要がある。

【表1 「真正な学び」の単元構成のフレームワーク】

単元構成の観点	留意点
①トピックの設定	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの課題意識に基づいているか。 ・現実社会に正統的にアクセスするものか。(現実的なトピックか) ・概念的な広がりを持つトピックか。 ・様々な分野の学問の成果を必要とするものか。
②トピックに関連する事物・事象の設定 【トピックに正統的にアクセスする事物や環境】	<ul style="list-style-type: none"> ・大人世界に見られる認知活動の一般的な形態に関わることができるものか。 ・子どもたちの見方、考え方を変革する可能性をもつものか。 ・トピックに正統的にアクセスするものか。(トピックの解決につながるものか)
③トピックに対する探究・調査・伝達方法の設定 【トピックをめぐる教科の枠を超えた探究】	<ul style="list-style-type: none"> ・科学的、合理的な調査方法か。(学校内だけの知識にとどまるものにならないか) ・各教科の学習成果を生かし、かつ関連・系統づけていくものか。 ・トピックについてのより深い理解が得られる探究か。
④トピックのまとめ・成果 【学校の枠を超えた意味ある学習成果】	<ul style="list-style-type: none"> ・現実的な提案になっているか。 ・学校外の人々(地域や家庭、専門家等)が納得する提案になっているか。

「真正の学び」の「知識の構築」「鍛錬された探究」「学びの学級外の価値」の観点を、総合的な学習において、「トピックに正統的にアクセスする事物や環境」、「トピックをめぐる教科の枠を超えた探究」、「学校の枠を超えた意味ある学習成果」と置き換え、単元構成のフレームワークを示したものが、表1である。さらに、表1のフレームワークに、BCGTの緑化プログラムの取り組みを当てはめたものが表2である。

【表2 BCGTの緑化プログラムの事例】

単元構成の観点	ブラック・カウンティ・グランドワーク・トラストの事例
①トピックの設定	損なわれたり、放置されたりした企業所有の景観を改善する
②トピックに関連する事物・事象の設定 【トピックに正統的にアクセスする事物や環境】	<ul style="list-style-type: none"> ・会社との相談会 ・土地の分析・調査 ・植物その他の材料の選択 ・関係費用の調整 ・コンピューターを利用した設計
③トピックに対する探究・調査・伝達方法の設定 【トピックをめぐる教科の枠を超えた探究】	<ul style="list-style-type: none"> ・土地の所有者へのインタビュー ・他の公園、施設の観察 ・公園、施設を使っている人々へのインタビュー ・周辺の環境の調査（住宅環境等） ・企業を説得するための計画、プレゼンの作成。
④トピックのまとめ・成果 【学校の枠を超えた意味ある学習成果】	<ul style="list-style-type: none"> ・景観のデザインの会社への提出。

総合的な学習の単元設計にはまず、単元を貫くトピックの設定が必要不可欠である。このトピックは「子どもの課題意識に基づいているか」「現実社会に正統的にアクセスするものか。（現実的なトピックか）」「概念的な広がりを持つトピックか」「様々な分野の学問の成果を必要とするものか」という条件を満たすものでなければならない。例えばBCGTの緑化プログラムでは、子どもは地域にある工場跡地の改善計画を企業から正式に依頼され、基金も供給されている。自分たちが地域を実際に変えるのだという、社会に現実的にアプローチできる課題となっている。また景

観改善のデザインという課題は、土地の調査、植物の選定、地域住民のニーズ、経費の調整という、社会的、科学的、経済的分野の知識に広く関わるものである。

トピックに関連する事物・事象の設定には「大人世界に見られる認知活動の一般的な形態に関わることができるものか」「子どもの見方、考え方を革新する可能性をもつものか」「トピックに正統的にアクセスするものか。（トピックの解決につながるものか）」という観点が重要である。BCGTの緑化プログラムの事例では、会社、工業跡地、植物、関係費用、コンピューター、さらには周辺地域等、デザインの提案に関わる様々な事物、事象に子どもがアクセスしていることがわかる。これらが子どもの社会認識、科学的な知識を広げる教材であるのは言うまでもない。

これらの事物・事象に対してインタビューや観察、調査、分析という探究を行い、それらの結果をまとめ、結果を見積もり調整した上でデザインを作成することで、子どもはいろいろなことを照合する能力、考えを発表する能力、話す能力、調整能力を磨くことができたとと言える。また、ひとつのトピックをめぐる、討論や検証がなされた結果、知識間の関連や系統性が生まれ、トピックについてのより深い理解を保障することができる。

「学校の枠を超えた意味ある学習成果」の実現には、「科学的、合理的な調査方法か（学校内だけの知識にとどまるものにならないか）」各教科の学習成果を生かし、かつ関連・系統づけていくものか」「トピックについてのより深い理解が得られる探究か」という観点にそった探究活動の計画が必要である。「真正の学び」を保障する、総合的な学習は、このように目的・内容・方法が一体となったものでなければならない。

表1の「真正の学び」の単元構成のフレームワークを利用することで、教師は子どもや学校、地域の実態に適切した、総合的な学習を計画、実践できると考える。


5. 第3学年単元「三隅の柿を広げよう」の開発


「真正の学び」の単元構成のフレームワークを具体化した実践が第3学年単元「三隅の柿を広げよう」である。BCGTの緑化プログラムは企業と学校の連携によって実現したプログラムであるが、本単元は公民館との連携によって実現した実践である。

単元の授業計画を示したものが資料1である。


【資料1 第3学年単元「三隅の柿を上げよう」授業計画案】

第1次 三隅の特産品、柿について調べよう（社会科）

発問	事物・事象 環境	予想される子どもの発言・活動
<p>1. 三隅町は島根県で平田市と並ぶある果物の生産地です。それはなんでしょう？</p> <p>・西条柿を食べてみましょう。</p> <p>2. どうして三隅町ではこのようにおいしい西条柿ができるのでしょうか。</p> <p>・実際に柿農家に行って調べてみましょう。</p>	<p>西条柿</p> <p>学級での話し合い</p>	<p>・西条柿</p> <p>・長細い形の柿</p> <p>・ドライアイスでしぶを抜く</p> <p>・あまくておいしい。</p> <p>・すごくあまい</p> <p>・やわらかい</p> <p>・ぬるぬるした感じがする</p> <p>・柿づくりに適した気候なのかな。</p> <p>・柿づくりに向いた土地（土の質）なのかな。</p> <p>・何かおいしい柿をつくる工夫があるのかもしれない。</p> 
<p>3. おいしい柿の秘密を調べましょう。</p>  <p>4. おいしい柿ができるわけをまとめましょう。</p> <p>5. 柿農家の人は柿をつくる人が減っていると話していました。それはなぜでしょう？</p> <p>・柿を出荷する選果場に行って調べてみましょう。</p>	<p>柿園の観察 柿収穫体験 柿農家へのインタビュー</p> <p>学級での話し合い</p>	<p>・柿園のある場所は粘り気のある土で西条柿づくりに適している。</p> <p>【地質】</p> <p>・柿園のある平原は、朝晩は冷え、日中は気温が上がるのであまくおいしい柿ができる。【気候】</p> <p>・農家の人は、摘花・摘果を行い、柿の実が大きくなるように工夫している。</p> <p>・木の下に黒いシートをはり、太陽の光が当たりやすくしている。太陽の光が当たると色がよくなり、甘い柿になる。</p> <p>・害虫が発生する時期には計画を立てて、農薬をまいている。【高品質の工夫】</p> <p>・他の果物と出荷の時期をずらすため、早くできる早生を開発した。→ほかの果物と競争にならないためたくさん、高く売れる。【品種改良】</p> <p>・気候や土地に恵まれているだけでなく、柿農家の人たちがたくさん売れるように、おいしくするための工夫をしている。</p> <p>・たいへんな仕事だからじゃないのかな？</p> <p>・若い人が後を継いでくれないのかな？</p> <p>・柿をつくってももうからないのかな？</p>
<p>6. 選果場ではどんな仕事をしていますか。</p> <p>・職員さんへのインタビューからどんなことがわかりましたか。</p>	<p>選果場の見学</p> <p>職員へのインタビュー</p>	<p>・柿農家が出荷した柿を、色やつや、形のよさを見て選別している。</p> <p>・外見で分けた柿をさらにサイズで分ける。</p> <p>・外見とサイズで分けた柿としぶぬきのドライアイス装箱に入れる。</p> <p>・箱に詰められた柿はトラックで市場に配送される</p> <p>・選果場に入る柿の量が年々減少している。</p> <p>・柿栽培をする人が減り、高齢化している。</p> <p>・西条柿は主に中国地方や九州地方で食べられることが多く、東ではあまり食べられない。富有柿やひらたねなしといった柿の方が人気。</p> <p>・最近ではバナナのように手間をかけずに食べられる果物の方に人気があり柿全体の消費量も落ちている。</p> <p>・西条柿は足が速いため流通に適さない面がある。</p> <p>・西条柿のやわらかい触感が苦手な人もいる。</p>
<p>7. 三隅町の柿栽培についてわかったことをまとめて発表しよう</p>	<p>学級でのまとめ</p>	<p>・三隅は柿栽培に適した気候や土地であり、柿農家の工夫によっておいしい柿が造られている。しかし最近では柿の消費量や柿生産者の減少により柿の生産量が落ちている。</p>

発 問	事 物・事 象 環 境	予 想 され る 子 ども の 発 言 ・ 活 動
<p>1. 三隅の柿生産が抱える問題点は何だろう？</p> <p>・この問題は どうしたら解決できるでしょうか。</p> <p>・どうやったら、西条柿のニーズは高められますか。</p> <p>・西条柿のニーズを高めるための工夫について公民館の人から話を聞いてみましょう。</p>	<p>学級での話し合い</p>	<ul style="list-style-type: none"> 生産量が年々減少している。 柿農家の後継ぎがない。高齢化している。 西条柿に対するニーズが低下している。 西条柿のニーズが低下しているから、柿をつくっても売れない。あるいは儲からない。だから生産しなくなる。また儲からないと若い人が柿栽培をしなくなる。それでますます生産量が落ちる。 西条柿に対するニーズを高めればよい。 ポスターを作って西条柿のおいしさを伝える。 もっとおいしくなるように工夫する。 西条柿のマイナス面（あしがはやい・あまいすぎる・食感）を克服する。
<p>2. 公民館の人から西条柿のPRについて話を聞いてみましょう。</p> <p>・公民館の方の話を聞いた感想を交流しましょう。</p>	<p>公民館の人</p> <p>学級での話し合い</p>	<ul style="list-style-type: none"> 西条柿はあしがはやいので、干し柿にして長期保存できるような工夫を昔からしていた。 浜田商業高校では、西条柿のおいしさを生かす料理のレシピを開発している。 浜田商業高校では、西条柿の絵本を作成し、各施設に配っている。 J Aの人たちは、西条柿を使った柿シャーベットを開発した。 西条柿のおいしさを伝える柿フェスティバルを毎年、公民会主催で行っている。 いろいろな人が西条柿のためにがんばっている。 どうしてそんなにがんばるのか。 実際に話を聞いてみたい。
<p>3. 西条柿PR活動を体験してみましょう。</p> <p>・三隅町婦人会のみなさんと干し柿をつくってみましょう。</p> <p>・公民館の人たちが作成した「西条柿物語」の紙芝居を聞きましょう。</p>  <p>・高校生といっしょに高校生が考えた柿料理を作りましょう。</p>	<p>干し柿づくり (三隅町婦人会)</p> <p>紙芝居「西条柿物語」 (公民館)</p> <p>柿春巻きづくり (高校生)</p>	<ul style="list-style-type: none"> よく風が吹く場所に干さないと、カビが生えてしまう。 柿同士の感覚をあけて、ひもにつなげることが大切。 干して水分を抜くことで、長い間保存できるだけでなく、しぶがぬけて甘みが増す。 干し柿は昔の人が柿をおいしく食べるための工夫だった。 米の凶作で苦しむ三隅の人たちが、三隅の土地にあった農産物としてはじめてのが西条柿だった。 当時の村長さんが島根県に頼み込んで資金を出してもらった。それをもとに土地を開墾し徐々に柿園が広がっていった。 しかし戦争で柿園はすべて芋畑に変えられた。 戦争が終わって、肥料がない中でもみんなで穴をほり、苗木を植え柿園を広げていった。 洪水などの災害にもまげず栽培を続けた結果、昭和53年には92トンもの柿を栽培することができた。 柿の甘さを生かすようによく工夫されている。 高校生は西条柿のよさをよくわかっていて、それを生かすための工夫をしている。
<p>4. なぜみんなは西条柿のPRのためにがんばるのだろう？</p> <p>・みんなができることはないかな？</p>	<p>話し合い</p>	<ul style="list-style-type: none"> 昔の人が大切にしてきた西条柿を守りたいから。 おいしい西条柿をなくしたくないから。 西条柿で三隅町を盛りあげていきたいから。

第3次 三隅の柿を広めよう②～わたしたちにできること

発問	事象・事象環境	予想される子どもの発言・活動
<p>1. 三隅の西条柿栽培を守るためにみんなができることはないですか。</p> <p>・具体的にどんなことができますか。</p>	<p>学級での話し合い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・西条柿を大切に守ってきた人たちの苦勞を伝える。 ・高校生のように柿レシピをつくる。 ・学習発表会で、西条柿の歴史を劇にして伝える。 ・柿フェスティバルで、西条柿のおいしさや作り方や、柿レシピ等を伝えるポスターを出品する。 ・干し柿を使った簡単にできるスイーツのレシピを考える。
<p>2. 計画を立てて実行しましょう。</p> 	<p>グループでの話し合い・活動</p> <p>柿フェスティバル</p> <p>学習発表会</p> <p>柿料理作り(柿カップケーキ)</p>	<p>【柿フェスティバルへのポスター出品】</p> <p>「西条柿のおいしさ」「西条柿の特徴」「西条柿の育て方」「西条柿のスイーツ」「西条柿の歴史」「西条柿の旅」</p> <p>【学習発表会 劇「西条柿物語」】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・場面ごとの台本作成・練習・準備 ・公民館、柿栽培農家などお世話になったところへの案内状送付 <p>【干し柿スイーツレシピ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・干し柿は好きな人は好きだが、甘すぎるのできらいな人は食べられない。 ・みんなが食べられるレシピの工夫をしよう。 ・誰でも簡単に作れるものがよい。 ・干し柿を細かく刻んだら食べられないかな。 ・干し柿入りのカップケーキをつくってみよう。 ・成功したらレシピをつくって学校みんなに配ろう。
<p>3. これまでの活動を振り返って交流してみましょう。</p>	<p>学級での話し合い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・家でも柿春巻きや柿カップケーキを作った。とても好評だった。 ・学習発表会の劇を見て、はじめて西条柿の歴史を知った三隅の人が多かった。やってよかった。 ・西条柿を大切に思う人が増えて、町をあげてみんなで西条柿を守っていけるといい。 ・将来は柿レストランを開きたい。

島根県浜田市三隅町では、公民館が中心となって町の特産品である西条柿のPR活動を進めている。柿生産者、JA、商工会議所との連携はもちろん、西条柿の普及を目的として小・中・高等学校の地域学習にも多く関わっている。

本単元は第3学年社会科「地域の人々の生産や販売にみられる仕事の特色」の発展学習として実践したものであるが、小学生児童と柿生産者、婦人会、JA（選果場）、高等学校をつないだ公民館の役割は大きい。

本実践のトピックとして取り上げたのは、地域の特産品である西条柿である。

島根県は、日本で最大の西条柿の栽培面積をもつ県である。その中でも三隅町は県下で1・2の生産量を誇る。その理由として西条柿づくりに適した土壌と、昼夜の寒暖差

が大きい気候という三隅町の特徴があげられる。これらの自然条件を生かして、柿農家は、摘花・摘果や害虫の効果的な駆除、早生の品種改良等、市場のニーズに合わせた栽培の工夫を行ってきた。その努力の甲斐あって昭和53年には92トンもの生産量を誇るまでに柿生産は成長した。しかしながら、西条柿の販路は主に中国・九州地方に限られ、東日本ではその甘さや食感から人気がなく、富有柿、松本早生など種や渋みのない柿が一般的である。それに加えて、近年では簡単に食べられる果物一例えば包丁を使わずに皮がむけるバナナなどーの需要が増し、柿に対するニーズは低下しつつある。この結果、三隅町の柿生産に従事する人は年々減少し、柿農家は後継不足、高齢化という問題を抱えている。

このような問題に対して、JAや公民館、柿農家は連携・協力して西条柿のPRに努めている。例えば、毎年11月に開催される「柿フェスティバル」では、柿収穫体験、西条柿の直売、柿シャーベットの販売、柿の種飛ばし大会など様々なイベントを行い、西条柿の普及を進めている。また、西条柿を使った商品開発など、新たなニーズの開発にも取り組んでいる。

本単元は第1次「三隅の特産品、柿について調べよう」、第2次「三隅の柿を広げよう①～柿を守る人たち～」、第3次「三隅の柿を広めよう②～わたしたちにできること」の3つのパートからなる。

第1次は社会科の単元である。三隅町が日本でも有数の西条柿の産地である事実から、「なぜ三隅町で西条柿栽培がさかんなのか」問いを設定し、おもに見学、インタビュー等を通して追求していく。その結果「三隅は柿栽培に適した気候や土地であり、柿農家の工夫によっておいしい柿が栽培されている。しかし最近では柿の消費量や柿生産者の減少により柿の生産量が落ちている」という知識を獲得する。第2次以降が総合的な学習の単元となる。第1次において明らかとなった柿生産の問題「最近では柿の消費量や柿生産者の減少により柿の生産量が落ちている」に対して、三隅町の人々はどのように向き合っているのか、また自分たちができることは何かについて追求していく。

第2次では、西条柿の普及に尽力する人たちの活動に実際に参加し、「なぜ、西条柿のためにがんばるのか」について追求していく。具体的には、三隅町婦人会による干し柿づくり、公民館が作成した「西条柿物語」の読み語り、高校生が開発した西条柿料理の調理など、西条柿のPRに携わる人と、体験を通して関わることで、「地域の産業を守ることは、そこに住む人々にとってどのような意味があるのか」について実感として学んでいく。

第3次では、第2次での学びをもとに、自分たちが西条柿のためにできることを考え実践する。実際の活動では、柿フェスティバルにポスターを出品したり、学習発表会で西条柿の歴史を劇にして発表したり、柿スイーツを開発したりした。

西条柿という地域資源を通して、地域の自然、産業、文化、経済についての知識を関連付け、自分の住む地域についての認識を深めることが、単元の大きなねらいとなる。

6. 実践の考察

第3学年単元「三隅の柿を広めよう」の意義を、「表1 単元構成のフレームワーク」の観点をもとに分析する。表3はカリキュラム・フレームワークにそって単元「三隅の柿を広めよう」の実践をまとめたものである。

(1) トピックの設定

トピック設定の観点は①「子どもの課題意識に基づいているか」②「現実社会に正統的にアクセスするものか（現実的なトピックか）」③「概念的な広がりを持つトピックか」④「様々な分野の学問の成果を必要とするものか」である。

【表3 単元 「三隅の柿を広めよう」の単元のフレームワーク】

単元構成の観点	単元「西条柿を広めよう」
①トピックの設定	西条柿のニーズを高めよう
②トピックに関連する事物・事象の設定 【トピックに正統的にアクセスする事物や環境】	(柿栽培へのアプローチ) ・柿園での収穫体験、見学 ・選果場の見学、インタビュー (西条柿PRに関わる人へのアプローチ) ・干し柿づくり体験 ・「西条柿物語」読み語り体験 ・柿春巻きづくり体験
③トピックに対する探究・調査・伝達方法の設定 【トピックをめぐる教科の枠を超えた探究】	・学習発表会における劇「西条柿物語」の創作 ・柿フェスティバルでのポスターの出品の準備(西条柿についての調査・まとめ) ・柿スイーツの開発
④トピックのまとめ・成果 【学校の枠を超えた意味ある学習成果】	・劇「西条柿物語」の発表 ・柿フェスティバルへの参加 ・柿スイーツレシピの配布

第1次の社会科学学習において、「西条柿に対するニーズの低下したため、柿栽培に従事する人が減少し柿の生産量も落ちている」ことを学習した子どもたちにとって、「西条柿のニーズの低下」が三隅町にとって重要な問題であることを理解するのは難しくない。その意味で、「西条柿のニーズを高めるには」というトピックは現実問題に正統的にアクセスするものとなっている。また、西条柿の普及に関わ

る活動は、文化（料理）、語り（文学）、経済、歴史など多分野にわたり、それぞれが互いに関連している。

（2）トピックに対する事物・事象の設定

活動の対象となる事物・事象の設定の観点は①「大人世界に見られる認知活動の一般的な形態に関わることができるものか」②「子どもたちの見方、考え方を変革する可能性をもつものか」③「トピックに正統的にアクセスするものか。（トピックの解決につながるものか）」である。

本実践では、柿農家、選果場など実際に柿生産に関わる場所や人にアプローチするだけでなく、柿普及に携わる公民館や婦人会、高校生の活動に参加することで、①を達成している。そしてこれらの事物や事象が、②の子どもの柿に対する見方や考え方を新たにしていることは、子どもの書いた以下の手紙から推察できる。

（高校生との柿料理体験のお礼の手紙：A児）

12月6日に三隅小学校で柿料理の作り方を教えてくださってありがとうございました。びっくりしたことは柿ではるまきが作れることです。理由はとてもあまいからるまきはちょっと合わないんじゃないかと思っていたからです。でもじっさいに食べてみるととてもおいしかったです。また酢も、柿酢というものなので、柿はいろんなものに変化できるんだな、と思いました。じっさいに食べて柿がこんなにおいしいのはなんでかなと思いました。

（干し柿づくりのお礼の手紙：B児）

今日は干し柿づくりに協力してくださってありがとうございました。今日の体験で柿の皮があんなにやわらかいことを知りました。今日の干し柿づくりはとてもたいへんでした。理由は皮をむくのはすごくかんたんだったけど、柿をひもにとおすぎょうがたいへんでした。あなをあげて柿を干すのがむずかしかったです。「干し柿づくりはたいへんなんだなあ」と思いました。

ひもにぜんぶ柿を書けた後、それをもっていくときに、すごく「柿落ちないかな」と心配しながらもっていきました。おいしい柿になってほしいです。

A児は高校生の開発した柿料理体験を通して、「柿はいろんなものに変化できるんだな」「柿がこんなにおいしいのはなんでかな」と柿に対する見方を新たにしている。B児の手紙の内容からは、干し柿づくりの大変さに共感し、柿

に対して愛情をもって接することになった様子を読み取れる。これらの体験は、第3次「三隅の柿を広めよう②～わたしたちにできること」での、自分たちの作った干し柿のおいしさが伝わるスイーツを考案したり、西条柿栽培の苦労を伝える劇を上演したりするというトピックの解決につながるものである。

（3）トピックに対する探究・調査・伝達方法の設定

探究・調査・伝達方法の設定の観点は①「科学的、合理的な調査方法か（学校内だけの知識にとどまるものにならないか）」②「各教科の学習成果を生かし、かつ関連・系統づけていくものか」③「トピックについてのより深い理解が得られる探究か」である。

観点①「科学的、合理的な調査方法か（学校内だけの知識にとどまるものにならないか）」については課題が残る。本単元のトピックは「西条柿のニーズを高めよう」であるが、商品としての西条柿の価値をあげるためには、ブランド化や販路の確保、SCM（サプライチェーンマネジメント）など様々な販売戦略の考察が必要となる。例えば、他県のブランド化された特産品との比較（宮崎県のマンゴー、小豆島のオリーブなど）や他県の柿の消費傾向の分析等を通して、それは可能になる。しかしながら、本単元の実践では、探究対象は地域内の事物・事象にとどまり、そのようなより広い視点からのアプローチの面は弱かった。そのため、「学校の枠を超えた現実的なアプローチになったか」の側面は弱い。しかし、②「各教科の学習成果を生かし、かつ関連・系統づけていくものか」③「トピックについてのより深い理解が得られる探究か」については一定の成果がみられる。資料2は、定期的に発行していた学級だより「へんしん」の一部である。子どもは、第1次の社会科学習の成果を生かし、西条柿のニーズが伸びない原因を考え、「西条柿のよさをもっと知ってもらいたい」という願いをもって、柿フェスティバルでのポスター出品計画を立てることができた。また、ポスターの作製や劇の上演を通してトピックである西条柿についての認識を深めることもできた。

（4）トピックのまとめ・成果

観点①「現実的な提案になっているか」、観点②「学校外の人々（地域や家庭、専門家等）が納得する提案になっているか」については、学校内だけでなく、地域に対して西条柿に対する認識を開いたという点では評価できる。劇「西条柿物語」の発表や柿フェスティバルへの参加、

【資料2 学級だより「へんしん！」の抜粋】

柿フェスティバルで西条柿のよさを伝えよう！

平木義人さんから柿についてのお話を聞き、三浦求さんの柿園で柿収穫体験、柿シャーベットの味見をさせていただき、選果場では柿が箱につめられ市場に送られていく様子を見学し、すっかり西条柿にくわしくなった3年生です。先日は白砂公民館からお借りした紙芝居を通して、三隅の西条柿の歴史も少し詳しくなりました。いろいろな苦勞の末、三隅の（くわしく言えば東平原の）柿園が造成されていったことを理解した人も多かったです。

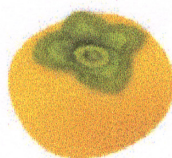
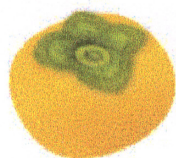
しかしながら、西条柿は柿の中ではポピュラーな柿ではありません。「たくさん作られている柿ランキング」は次のとおりです。

第1位 富有柿

第2位 平核無

第3位 刀根早生

第4位 甲州百日



西条柿の学習をする前は、「富有柿がすき〜」と3年生にも大人気だった富有柿です。人気のわけは、しぶみしなくてもいいこと、日持ちがよいことでしょう。2位の平核無は、某スーパーに担当が買い物に行ったとき、店頭に並べてありました。果汁が多くてやわらかく、甘くてまろやかな口当たりが人気だそうです。（今度食べてみたいです）西条柿は、ほとんどが中国地方や九州地方に出荷され、あまり東のほうでは食べられていません。この事実を伝えると、3年生から「えー！！」と驚きの声があがりました。（素直な3年生です）その理由をみんなで考えてみました。みんなから出た意見は次のとおりです。

○しぶをぬくのが面倒 ○すぐにやわらかくなる ○味が東の人には合わない

「いいところをついているなあ」と感心しました。西条柿でなく、柿全体の消費量が減少しているのも気になるところです。（最近ではバナナとか手間をかけずに食べられる果物が人気のようです）合わせて、昔は20件以上もあった柿栽培農家が今は減少し、選果場に出荷される柿の量自体が減少しているそうです。この状況を受けて「もっと西条柿のよさを伝えよう！」ということで、3年生で11月2日（土）に行われる柿フェスティバルに、柿についてのポスターや新聞等を出品することにしました。話し合いの結果、「西条柿のおいしさ」「西条柿の特徴」「西条柿の育て方」「西条柿のスイーツ」「西条柿の歴史」「西条柿の旅」について紹介するものをつくることにしました。どこまで、できるかはまだわかりませんが、みんなで西条柿のよさを伝えるべく、がんばりたいと思います。

柿スイーツレシピの配布を通して、長年、地域に住む人たちに西条柿の新たな側面を見せることができた。実際に、子どもと一緒に柿春巻きや柿カップケーキを作り、「柿のおいしさに気づきました」とコメントを寄せる家庭もあった。当初は「甘すぎる」という理由で、柿が嫌いだった子どもも柿が食べられるようになった。柿に関わる人々の努力や工夫に触れたことや柿の新たな味に気づいたことが

その要因と思われる。このように「西条柿のニーズを高める」というアプローチには課題が残るものの、「西条柿についての認識を開く」という面では、一定の成果があったのではないかと考える。

7. 研究の成果と課題

本研究の成果として以下の点があげられる。

1つは、総合的な学習における、教師の主体的な単元設計（カリキュラム・マネジメント）を支援する単元構成のフレームワークを示したことである。総合的な学習の実践に対して、「学習指導の目的や内容がはっきりしていない」「単元計画を立てるのが難しい」「指導方法がわからない」という悩みを抱える教師は多い。ニューマンの「真正の学び」の観点をもとに、単元設計の内容・方法の視点を示したことは、教師が主体的にカリキュラム・マネジメントを進めていく上での支援になると考える。

もう1つは、単元構成のフレームワークに基づく単元開発を行ったことである。トピックをもとに、現実社会のありように正統的にアクセス（参加）することで、子どもたちは、地域社会の一員としての自覚を持つだけでなく、知識間の関連・系統づけを行い、社会的事象についてより深く理解することができた。本物に触れることで、本物の知識を獲得することができる。特に「学校の枠を超えた意味ある学習成果」を念頭において、単元設計を行う必要がある。

BCGTの緑化プログラムでは企業が、単元「三隅の柿を広めよう」では公民館が、学校と社会をつなげる重要な役割を果たした。このような外部との連携は、「真正な学び」の実現にとって必要不可欠である。学校は率先して外に協力を呼びかけなければならない。こうした学校と外部との連携のあり方を模索していくことが今後の課題である。

【引用文献】

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領』東洋館出版社, 2008年, pp. 110 - 111.
- 2) ロジャー・ハート著, 木下 勇・南 博文監修, IPA日本支部訳『子どもの参画 コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社, 2000年, pp. 78-79.
- 3) 中央教育審議会『幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』2016年, 文部科学省ホームページ, pp. 236 - 237.
- 4) 文部科学省『小学校学習指導要領(案)』2016年, 文部科学省ホームページ, pp. 160 - 163.
- 5) フレッド・M・ニューマン著, 渡部竜也・堀田 諭訳『真正の学び/学力一質の高い知をめぐる学校再建-』春風社, 2017年, pp. 35 - 41.
- 6) ニューマン, 前掲書, p. 36
- 7) 田中 伸「コミュニケーション理論に基づく社会科教育論—「社会と折り合いをつける力」の育成を目指した授業デザイン」『社会科研究』全国社会科教育学会, 83号, 2015年, p. 2
- 8) 村井万寿夫「総合的な学習の指導にあたる教師の意識に関する研究—金沢市の小学校教師を対象とした調査を手がかりに—」『日本教科教育学会誌』日本教科教育学会, 第40巻2号, 2017年, pp. 32-36.
- 9) 村井, 前掲書, pp. 40 - 41.

【参考文献】

- 1) ジーンレイヴ, エティエンヌ・ウェンガー著, 佐伯 胖訳, 福島正人解説『状況に埋め込まれた学習 - 正統的周辺参加 -』産業図書, 1993年.
- 2) ルーシー・A・サッチマン, 佐伯 胖監修, 上野直樹, 水川喜文, 鈴木栄幸訳『プランと状況的行為—人間・機械コミュニケーションの可能性』産業図書, 1999年.
- 3) スティーブン・J・ソーントン著, 渡部竜也・山田秀和, 田中 伸, 堀田 諭訳『教師のゲートキーピング—主体的な学習者を生む社会科カリキュラムに向けて—』春風社, 2012年.
- 4) 佐藤 学『「学び」から逃走する子どもたち』岩波ブックレットNo. 524 岩波書店, 2000年.
- 5) バーナード・クリック著, 関口正司監訳, 大河原伸夫・岡崎晴輝, 施光 恒, 竹島博之, 大賀 哲訳『シティズンシップ教育論—政治哲学と市民—』法政大学出版局, 2011年.
- 6) 佐伯 胖「準備委員会企画 基調講演2 学びの場がうまれるとは」『教育心理学年俵』第54集, 2015年, pp. 154-159
- 7) 黒田友紀「真正の学びとラーニング・コミュニティを中心とする学校改革の検討」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学編)』第63号, 2013年, pp. 71-82

A Study of Curriculum Management For Integrated Studies

-The Case of Unit "How can the SAIJO persimmon become famous"-

Michiko Kamita

*Department of Primary Education, Faculty of Education, Okayama University of Science
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005*

(Received October 17, 2017; accepted December 4, 2017)

This study examines Curriculum Management of Integrated Studies classes for "Authentic learning". Study result include the following two points.

Frist, this study proposes Curriculum framework that support Integrated Studies teachers in their role of as gatekeeper. The development of a framework for Integrated Studies classes foster children 's "authentic learning". Second, based on the above Curriculum framework, this study introduces a possible plan for the unit "How can the SAIJO persimmon become famous". After class, the children understood SAIJO persimmon as regional resource, and foster the ability to think the social issues.

Keywords:

Curriculum Management, Integrated Studies classes, Authentic learning, gatekeeper, social issues